保育士をめざす学生におけるソーシャルワーク業務に対する問題意識および意欲についての一考察

○近畿医療福祉大学　丸目満弓(会員番号008380)、関西福祉科学大学　立花直樹（会員番号007093）

キーワード：保育士、社会福祉援助技術、学生

１．研究目的

近年、児童を取り巻く問題が複雑化する中、保育の現場でソーシャルワーク（以下、SW）を効果的に用いることに対して社会的期待は高まっているが、実際の保育現場ではそれに十分応えられていていない、いわば“期待と実践における乖離”の現状がいくつかの先行研究で示唆されている。本研究では、まず“乖離”が生じる原因を **(1)保育現場、(2)保育士をめざす学生、(3)その他の問題 の３点に分類した**（図1）。その上で、保育士養成施設の学生に行ったアンケート調査の結果をもとに、(2)の問題を中心にそれらの一部を検証し、養成課程におけるギャップを改善するための課題についても考察を行った。

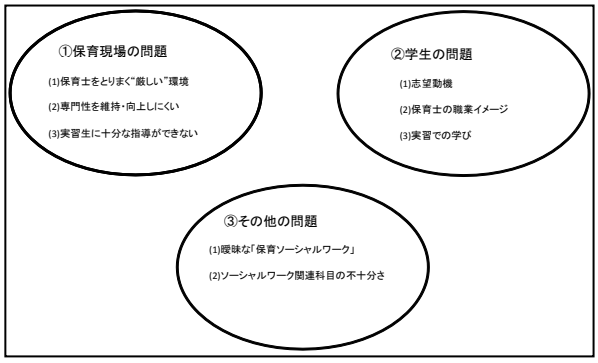

図１　保育士に求められる役割と実際の業務にギャップが生じる原因

２．研究の視点および方法

問題点として列挙した3点のうち、前述した(2)保育士をめざす学生の問題に対して、主に検証を行うために、アンケート調査を行った。

その結果から、例えば養成施設が学生に対してどのような関わりが足りないのか、重点的にどのような指導を行うことが望ましいか等のように、「(3)その他の問題」に対する改善を行うための、何らかの示唆が得られるのではないかと考えたたからである。なお、調査方法は以下の通りである。

調査対象：近畿地方にある保育士養成施設(3校)に在籍している学生　　273名
　　大学(2回生、3回生)…2校、短期大学(2回生)…1校

調査方法：質問紙を用いた集合調査(授業中に質問紙を配布し、その場で記入、回収する)

調査期間：2010年11月10日～11月12日

調査項目：①基本属性：性別、年齢、乳幼児期に利用した保育・児童教育サービス、社会福祉援助技術の履修の有無、児童福祉関連施設への実習状況
②保育者としての適性、ソーシャルワーカーとしての価値志向性を問う合計59項目
③SW業務に対する問題意識および意欲についての項目、さらに保育士がSWに取り組むべきではない回答した場合、そう考える理由、また保育現場で最もSW業務を担うのが適任と考える職種・立場についての質問を含めた、合計24項目

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に則り、調査に関する意義・使用目的のみならず回答への協力可否が不利益にならないことを説明の上、同意を得た者に実施した。個人を特定できないよう、調査は「無

記名・50 名以上の集合調査・座席間隔を確保」等のプライバシー確保に努めた。

４．研 究 結 果

(1)回答者の属性（表 1）

(2)SW 業務に対する意識と意欲

表１　回答者の属性

		男性	女性	合計
学校種別	短期大学	5 人	118 人	123 人
	4 年制大学	19 人	131 人	150 人
合計		24 人	249 人	273 人

SW に対する意識と意欲は高い相関があった。SW 業務に対し、「ぜひ取り組むべき」は、273 人中 140 人と半数を超え、「できれば取り組むべき」の 110 人(40%)を合わせて 92%を超えることからも、保育士として SW に対する意識は全体的に高い。一方で、自分自身が SW に取り組む意欲は、「ぜひ取り組みたい」は 61 人(22%)と、意識に比べるとその半分にも満たない。「必要があれば取り組みたい」169 人(62%)という消極的な考えや、「あまり取り組みたいとは思わない」という 37 人(14%)を合わせ、「SW 業務に対する意識は高いが、意欲は低い」という図式が見える（**図 2**）。

(3)個々の援助技術に対する意識と意欲（**図 2**）

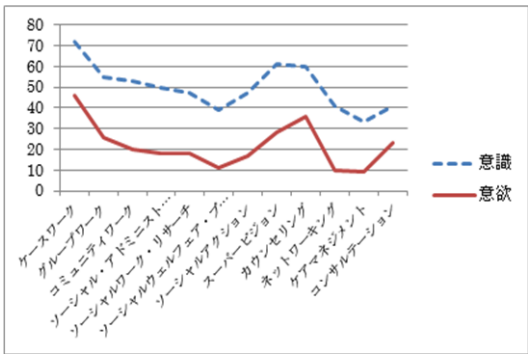

図２　ソーシャルワークに対する意識と意欲

個々の援助技術に対する意識では、上位 3 項目は、ケースワーク、スーパービジョン、カウンセリングとなっている。下位 3 項目は、ネットワーキング、ソーシャルウェルフェア・プランニング、ケアマネジメントである。意欲についても、順位は違うものの同様の結果であった。

ケースワークやカウンセリング、スーパービジョンは具体的に援助内容がイメージしやすく、クライエントやスーパーバイザーに対して、個別の関係を結んで援助を行う(受ける)特徴がある一方で、意識・意欲ともに低い項目については、ネットワーキング、ケアマネジメントが共に、保育士以外の職種、または所属機関の外部との連携が必要とされることが、敬遠する理由であるとも推測される。

(4)SW は保育士が行うべきではないと考える理由

業務に余裕がないと思うから	14 人
保育士の業務範囲ではないと思うから	6 人
他職種が行うべきであると考えるから	3 人
養成カリキュラムの中での学習内容が不十分	3 人

(5)保育現場において SW 業務を行うべき人間とは

現場の保育士	143 人
ソーシャルワーカー(専門職)	124 人
主任クラスの保育士	66 人
園長	65 人

５．考 察

「学生の SW 業務に対する意欲が低い」という結果については、養成課程において何らかの取り組みが必要である。2011 年度より新設された「保育相談支援」において現場を具体的にイメージできる演習や事例を豊富に学ぶほか、実習前後に SW 関連科目を配置するなど、カリキュラム上の工夫による一定の改善は可能であろう。また意欲が低い理由について、そもそも興味・関心が薄い、或いは関わる自信がもてない等、他にいくつか異なる理由も予想され、さらなる詳細なリサーチが必要である。しかし本質的な問題解決に向け、現状では「曖昧な保育ソーシャルワーク」を、誰が、どんな問題にどう関わるかなど、議論を深めることが重要であり、最終的には、行政が保育現場での SW 業務に対する具体的な“位置づけ”を行うべく制度的枠組みを設けるなど、SW を行う上での拠り所を明確にすることが必要である。